

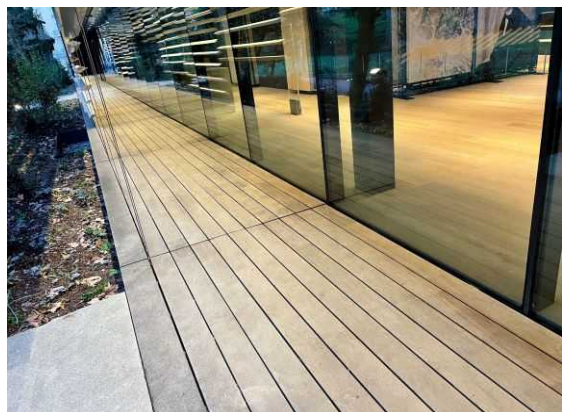
110 アルベール＝カーン美術館に見る日本建築の今と昔（2022年5月5日）

4月2日、6年間の工事期間を経て、オー＝ド＝セーヌ県立アルベール＝カーン美術館がリニューアルオープンしました。この美術館があるアルベール＝カーン庭園には、日本村（le Village Japonais）と呼ばれる古典的な庭園と現代庭園の二つの日本的な庭園があることを以前にご紹介しました（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100169002.pdf>）。新しく建てられた美術館では、現代と昔の二つのスタイルの日本建築を見ることができます。

この美術館は、日本を代表する建築家の一人である隈研吾が設計しました。隈研吾の建築の特徴の一つに、木材を取り入れていることが挙げられます。この建物でも、木材が使用されています。横に筋が入っているように見える外観は、簾（すだれ）を連想させます。しかし、近くで見ると、棒状のものは木材と金属の二種類の素材が使われていることが分かります。木材と金属の両方を使うことで、メタリックシルバーの外壁にガラスを使った現代建築に合った「簾」になっており、日本村にある日本家屋と一緒に視界に入っても違和感がありません。



この美術館では、もう一つ木材が使われているところがあります。それが、「縁側」です。縁側とは、庭に面した長い木の板の廊下で、かつては多くの日本家屋にありました。縁側は地上よりも高い位置にあり、かつての日本では、縁側に座って日向ぼっこをしたり、近所の人が集まって世間話をしました。親しい人であれば、玄関を通らずに縁側へ直接入ってくることもありました。現在では縁側がある家は少なくなりまし



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

たが、縁側は建物の内部にありながら、外からアクセスしやすく、人と人とのコミュニケーションを生み出す場所でした。

伝統的な要素を取り入れた現代建築の美術館の中には、古典的なスタイルの建物があります。それは、清友庵と呼ばれる茶室です。裏千家がオー＝ド＝セーヌ県へ寄贈したもので、美術館のリニューアルオープンに合わせて館内に移築されました。アルベール＝カーン庭園の日本村にも茶室がありますが、茶室には暖房設備がないため、寒い季節は茶会を催すことができません。しかし、清友庵は、美術館内にありますので、季節を問わずに茶会を催すことができます。今年の秋以降に、清友庵でも茶会が催される予定です。



リニューアル記念の企画展 (Autour du Monde -La traversée des images, d' Albert Kahn à Curiosity-) では、アルベール・カーンが集めた世界各国を写した写真や映像を通して、20 世紀初頭の世界旅行を楽しむことができます。当時の日本を写した写真やアルベール・カーンの財政支援によって日本に滞在した画家マチュラン・メウー (1892-1956) が描いた日本も見ることができます。ぜひアルベール＝カーン美術館で、日本の今と昔をご覧ください。

アルベール＝カーン美術館 <https://albert-kahn.hauts-de-seine.fr/> (仏語)